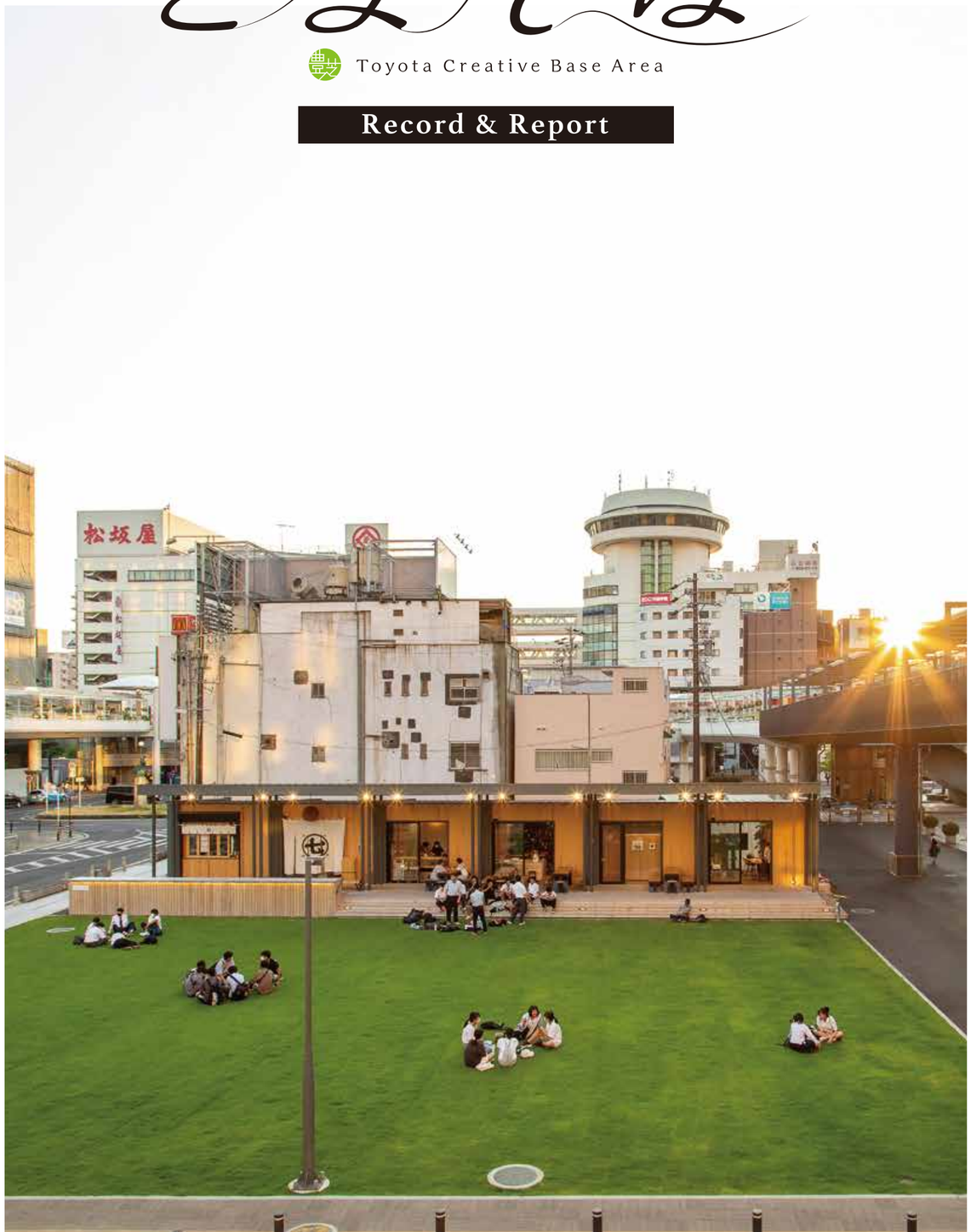
What do you like about
TOYOCBA?

とよしば

Toyota Creative Base Area

Record & Report



とよしば

Toyota Creative Base Area

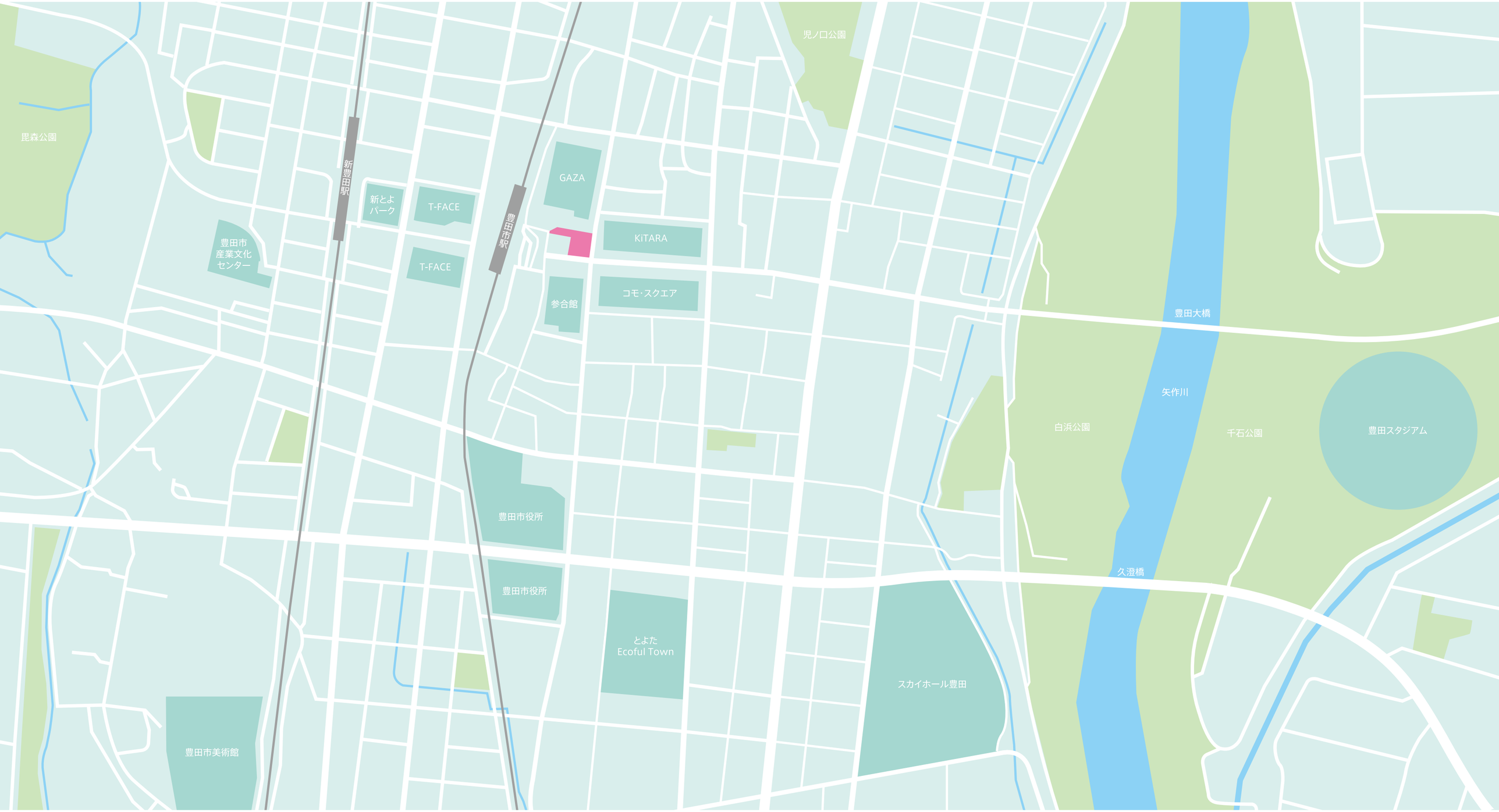
Everyday

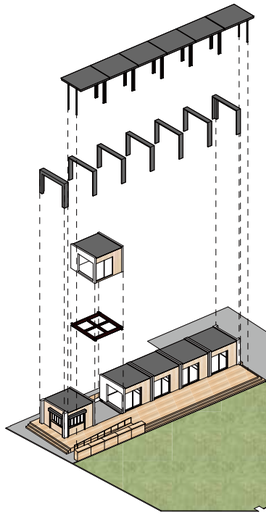
Course

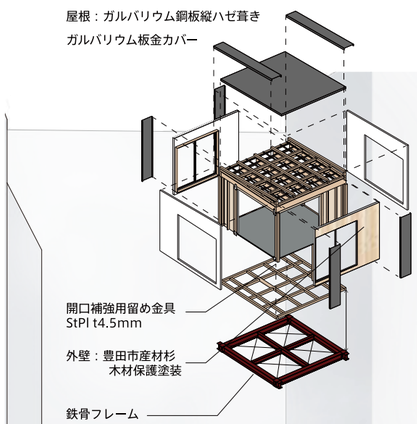
Event

Event

ToyocbaMAP


児ノ口公園
毘森公園
新豊田駅
新とよパーク
T-FACE
T-FACE
豊田市産業文化センター
豊田市駅
GAZA
KiTARA
参合館
コモ・スクエア
豊田大橋
矢作川
白浜公園
千石公園
豊田スタジアム
豊田市役所
豊田市役所
久澄橋
とよた Ecoful Town
スカイホール豊田
豊田市美術館





とよしばの設計について

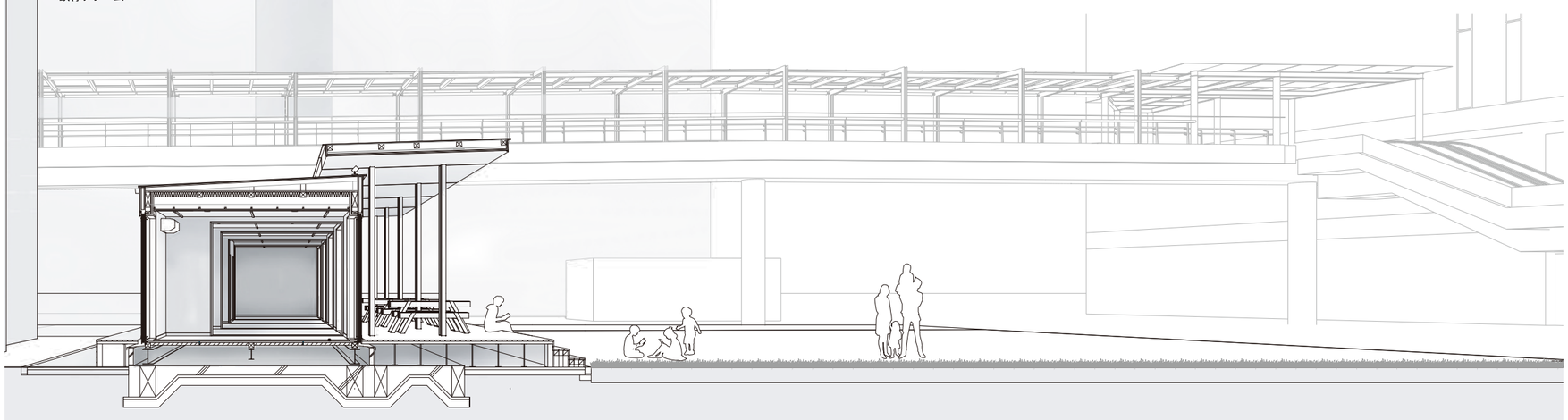
abanba代表
番場俊宏
Toshihiro Banba

1978年神奈川県生まれ。東海大学工学研究科修士課程修了。シーラカンスアンドアソシエイツ、小泉アトリエを経て、2010年よりabanba主宰。東海大学非常勤講師。建築、インテリアの設計を中心に、まちづくり、アーバンデザインなどの活動を行っている。2016,2017,2018,グッドデザイン賞、2016神奈川建築コンクール優秀賞、Taipei International Design Award2017

「とよしば」は豊田市駅前再整備の過程で生まれた空地に、暫定的に整備された芝生広場と仮設建築です。建築部分は、これから変化が続くことが予想される駅前広場の整備に合わせてフレキシブルに姿を変えることができるように、クレーンで吊り上げて移動させることが可能なサイズのユニットに分割し、鉄骨の架台の上に木造のフレームを乗せ、壁や床の仕上げも取り外せるようにして、ユニットの数の増減や組み替えに対応しています。

今は、広場と建築が連携したイベントが行われたり、テラスで子供たちが宿題をするなど、これまで周囲の建築の中で行われていたアクティビティが街中に滲み出し、駅前に新たな賑わいの風景が生まれています。

豊田市駅前の計画はカスタマイズの過程にあります。とよしばで起こることが、「つかう」と「つくる」のサイクルの中で、使う人の意見や、思いを反映しながら、これからの計画にフィードバックされていきます。



What is "Toyocba"?

とよしばとは

「とよしば」とは、豊田市の名鉄豊田市駅前にある芝生広場の略。また、Toyota Creative Base Areaの頭文字をとった愛称のこと。

広場には細長い建物が併設され、飲食店やギャラリースペース、ちょっとした機材を備えた工作室、多目的に使えるレンタルスペースのスタジオなどが軒を連ねます。部屋ごとにそれぞれの機能がありますが、創造力を刺激し合うようなクリエイティブな空間を目指しています。

飲食店は、夜は酒処「〇七商店（まるななしょうてん）」、昼は肉系讃岐うどん「肉麺奴等（にくめんやつら）」という、うどん屋。若者向けのオリジナルドリンクを提供する「茶虎（ちゃとら）」としても営業しています。ご飯屋にも、カフェにも、ちょっとした居酒屋にもなれるお店。どの時間にも気軽に利用できて、交流できる場でありたいと思っています。

また、豊田のニュープレーヤーを育てる人材育成プログラム「とよしばスクール」も2020年度から始動。豊田の街を「使う」「盛り上げる」イベントを企画・実践するプレイヤーを育てようとしています。

2022年度の期限終了までに仕組みをしっかりと作り上げて、次のプレーヤーに渡せるものを残したいと考えています。

芝生広場　交わる
- 市民や来街者の居場所
- 滞留行為の受け皿
- 街の賑わいを作る企画実施スペース

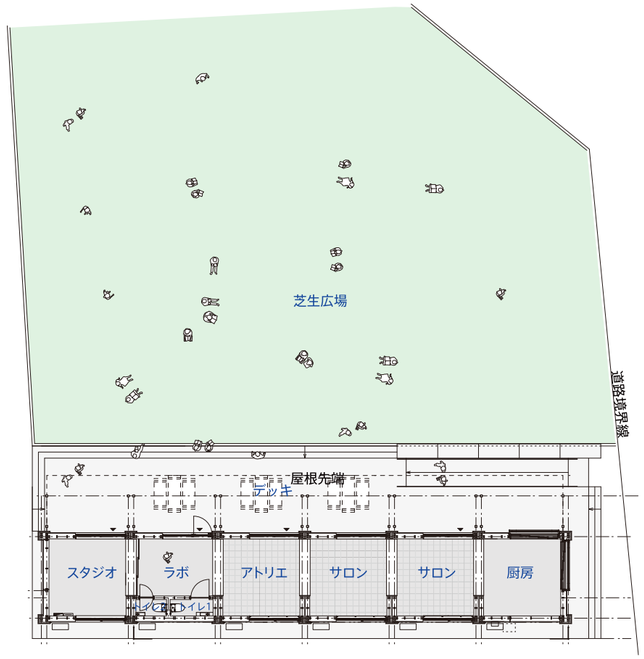
飲食店　集う
- 広場の目印
- 利用者が滞留するための動機づけ

工作室　生む
- ものづくりのシーンの見える化
- 市民の来街動機の増強
- 豊田ならではのシーンの創出

ギャラリー　伝える
- まちなかから、新しいものやこと、情報が発信されていることを見える化
- シビックプライドを育てる拠点

スタジオ　表現する
- 旬なローカル情報の発信
- 市民発の小企画実施スペース

スクール　育てる
- まちづくりの担い手の育成
- 市民を「受動的な参加者」から「能動的な担い手」へと育てていく



芝生広場

Lawn plaza

とよしばの象徴とも言える「芝生広場」。天然の芝である事にこだわり、手間はかかるけれど試行錯誤しながら自分たちで手入れします。芝の感触が素足でヨガやフラダンスをする人たちに、とても好評。

子供たちが走り回ったり、カップルが普通に散歩してたり。お弁当を持ってきてはママ友グループが子供と一緒にピクニック気分でアウトドアランチしたり。学生たちは広場のテーブルやカウンターにスマホを乗せて動画撮影したり。すっかりまちなかの日常に溶け込んでいます。

広場としては、イベント開催の会場としても大活躍。マルシェや展示会、青空ファッションショーも。立地の良さだけではなく、この場所への愛着でリピートしてくれる人も大勢います。とよしば主催のモルック大会も定着してきました。

日常もイベントもここがまちなかの交流拠点と言えるようなそんな場所を目指しています。

ビルに囲まれた中、突如広がる天然芝の広場。憩いの日常と、賑わいのイベント。二つの顔とも親しまれてます。

Marunana Store

○七商店

街なかの広場で、世代を越えて
人と人をつなぐ飲食店に
そんな想いで始まったのが○七商店です。

大きな暖簾が店の看板がわり。店先の天井から吊り下げられている杉玉は仲間の大工さんが自作で製作しプレゼントしてくれたもの。

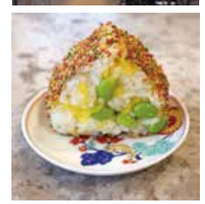
繋ぐ、広げる 広場の中の飲食店にできること

お昼のUdonは常時30種類以上のメニューの中から選べます。トッピングカスタム次第で自分好みのうどんにもカスタマイズ可能。ダシはあっさりしているが芯のあるしっかりとしたうどん出汁。麺はしっかり腰のある讃岐麺。

○七商店(マルナナショウテン)では、お昼は肉系讃岐うどん「肉麺奴等」(にくめんやつら)で営業。乳幼児からお年寄りまで愛される日本の大衆食を、決められた期間(3年7ケ月)ではありますが、地域に根ざしたいとスタートしました。麺は本場香川から仕入れています。だし醤油は大正時代から続く老舗の醤油を使用。うどんつゆも店舗で煮出して作っています。そこに、自分たちの感性もうどんの中で表現し、新しいうどんを豊田の街から発信しています。

また、豆腐×わらび餅×西尾の抹茶などを使用した飲む豆腐トリンクや、とよしば運営事業者こいけやクリエイトが運営する「こいけや養蜂園」の豊田で採れたはちみつを使用した、はちみつレモンスカッシュなど中高生から大人まで、とよしばの広場内で気軽に楽しめるお茶処として「茶虎 TEA STAND」も展開しています。

そして夜は酒処「○七商店」として営業。波佐見焼や九谷焼の豆皿に盛られた、三河黒七輪で焼く焼き鳥や、三河一色産のうなぎの串焼きなどの一品料理は、100円台から。地元豊田の日本酒や世界のクラフトビールなどが、店内はもちろんウッドデッキや広場内のどこでも楽しめます。ウッドデッキの空間では南部鉄器を使用した生ラム肉のジンギスカンも楽しむ事ができます。※ジンギスカンは要予約。



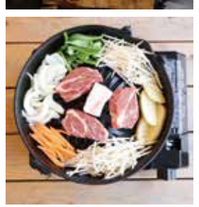
イベント時には多くの来場者に対応できるようにドリンクとフードのオペレーションも備えてあります。このように様々なシーンに合わせて稼働できるように○七商店は設計されています。また、飲食店営業の枠にはとどまらず、○七商店スタッフ全員が共有していることは「広場で人と人をつなげるHUB的な役割を担う場」を念頭においた営業です。例えば、○七商店に他県から初めて来る方が地元の常連の方々と一緒に飲めるような、きっかけづくりや空間づくり。そのことによって、新しい出会いが生まれ、そこで豊田の良さを知ってもらい、また他の地域の良さも知ることができて濃密な交流が生まれます。それが毎日繰り返されることで、明るく活発な駅前広場づくりにつながっていく。「あそこに行けば誰かいるなぁ」とか、「この間つながった人とイベントやるよ」とか、「呑んでたつもりがみんなが来てミーティングになっちゃったよ」なんて声をよく耳にします。そんな日常の光景が当たり前になっていく広場空間とはなんともワクワクするものです。駅前の広場の中にある飲食店でしかできない役割を日常の当たり前に変えていく。そんなお店が○七商店です。

肉系讃岐うどん「肉麺奴等」
人気UDONランキング

No.1
肉麺合盛り

No.2
ちくたま天ぶっかけ

No.3
Asian肉麺



What is "Toyocba"?

What is "Toyocba"?

Toyota Create Base Area

Public Space

とよしばの公共スペースをご紹介

Public Space

#1

工作室

Workshop

まちなかのクリエイテイブなスペース

工具とレーザー加工機でDIY

とよしばの運営はDIY精神が溢れています。収納がない！掲示板がない！！そんな時は自分たちで作っちゃいます。

そんなクリエイティブを助ける工具の装備。工作室の壁に並んでいます。もちろんこの工具たちは利用する人にも貸し出しています。

そして、とよしばのクリエイティブを支える相棒レーザー加工機。自分たちでパーツから組み立てて調整しながら使っています。

このレーザー加工機もレクチャー受講で貸し出し可能。普段はキーホルダーや貯金箱を作るワークショップも随時開催。

これを使えばオリジナルグッズも作成可能。中学生たちとコラボレーションしてイベントで配るオリジナルキーホルダーも作りました。

そんなに広くはないけど、創意工夫を刺激するまちなかの工作室。気軽にDIYが体験できます。

Public Space

#2

ギャラリー

Gallery

アートやカルチャーをまちなかに！

気軽な展示や情報発信のスペース。

大学生が参加者と作り上げた腕の彫刻からお化けかぼちゃまで、ジャンルに囚われず気軽に展示できる貸し出しスペース。豊田のまちなかを使ったアートイベント「とよたまちなか芸術祭」では展示スペースやインフォメーションセンターとして使われました。

美術館じゃなく、気軽にまちなかでアートに触れられる、作ったものを見せられる。そんなスペースです。

使える設備は、豊田市産木材で出来たピクチャーレール付きの展示ブースや、LEDスポットライト。

ギャラリーの中には「WE LOVEとよたステーション」も併設。豊田で開催するイベントの情報を発信するためのインフォメーションスペースになっています。

ここが豊田の文化発信スポット！になるように。

TOYOCBA TRUCK

とよしばの道具たち

01.

02.

03.

04.

05.

06.

07.

08.

09.

01.トラック

とよしばのテントなどの大型装備を収納保管。貸し出しの際はそのまま運搬できるので一石二鳥。籠台車も使い、組み立て式のパーツや箱などの什器も保管。マットな黒色は中京大学の学生たちと塗り上げました。

02.木製テント

木と木綿の天幕でできたナチュラルなテント。とよしばのテントといえばこれ。マルシェなどのイベントに統一感を出す演出。テントを見た人からは、私も使いたいという声が多数。

03.カウンター

車止めとして広場に設置している什器。イベントの際にはカウンターテーブルとして、キッチンカーの食卓に。イベントのない時はここにスマホを置いて、学生が良く動画撮影しています。

04.ポップアップテント

とよしばテントに合わせた白のイベントテント。雨天時はこちらのテントが活躍。横幕の装備もあるので、イベント演者の控え室などにも使われます。

05.ストリングライト

夜のイベントの演出と照明に。防雨機能も付いているので安心して野外で使えます。提灯と合わせると縁日みたいな雰囲気で盛り上がります。

06.音響セット

ミキサー、スピーカー、マイク、ヘッドセットをまとめて貸し出し。イベントのアナウンスや、ヨガのレクチャー、絵本の読み聞かせなどに対応できます。

07.蓄電池

とよしばの広場には電源スポットが用意されていますが、それでも届かない時や、出張イベントの時に活きるのが、「パーソナルエナジー」という蓄電池。これでお米を炊くと美味しいという話です。

08.プロジェクターとスクリーン

トラックに取り付けるスクリーンと、1万ルーメンの高出力プロジェクター。大画面でも映し出します。これで映画や動画を楽しめます。

09.モニター

普段は施設内にある55型のモニター。ミーティングやプレゼンの時のディスプレイに。広告動画を流してサイネージにも利用したりしています。

Public Space

#3

スタジオ

Studio

本に出会える。オンラインで遠くの誰かとも出会える。

教室、会議、サロン。多目的なレンタルスペース。

スタジオには二つのテーマがあります。まずは「本」。豊田市中央図書館との連携で選書された図書をとよしばで紹介しています。月ごとにテーマに合わせて変わる本棚は、絵本や写真集など目で楽しむ物も多く、その場で楽しむ事ができます。絵本や図録など目で楽しめるものも多く設置しています。また、図書館で廃棄予定の絵本を活用する活動「リサイクル絵本」の引き渡し場所にもなっています。中央図書館を利用するともらえるスタンプと絵本を交換するシステムです。捨てられてしまう運命の絵本に新しい貰い手を見つけるSDGsな活動です。

もう一つは「オンライン」。スタジオを拠点に配信を行う「とよたオンライン交流館」。気軽に雑談できたり、地元の人の話が聞けたり、オンライン越しに体操したり。緩やかにつながるコミュニティを月に1回開催しています。他にも豊田の魅力発信バラエティ「WE LIVE!」の配信も月4回行っています。

また、多目的なレンタルルームとして、ミーティング利用や、クラフトや絵画講座のスペースや、芝生広場のイベントの受付や控室としても使われ、とよしばの施設の中でも利用率の高い場所となっています。

TOYOCBA TRUCK

とよしばの
動く保管庫

広がる。とよしばから次の広場へ

TOTOCBA TRUCK ABILITY 01

WAREHOUSE

01 倉庫機能

常設倉庫ではないメリット

このトラックは「とよしば」の倉庫の役割を担っています。「荷物をしまうだけの倉庫でいいの？荷物をしまっておくだけではない多機能倉庫って面白いんじゃないかな？」から始まりました。一つのマルシェやイベントを開催できるほとんどの装備がこのトラック一台に詰め込まれています。

TOTOCBA TRUCK ABILITY 02

SCREEN

02 映像スクリーン機能

大型スクリーンを簡単設置

200インチのスクリーンをトラックの側面を利用することによって簡単に設置することができます。屋外で大型のスクリーンを設置しようとすると非常に大掛かりになってしまいます。また風の影響も受けやすいものもトラックに設置することによって、簡単に安全に設置することが可能になります。

TOTOCBA TRUCK ABILITY 03

SIGNBOARD

03 看板・サイン機能

大型サインを安全設置可能

ターポリンバナーや大段幕など、イベント時での大型サインを簡単安全に設置することができます。イベントタイトルの掲示や、フォトスポット作成など、映像スクリーン設置とは少し違った用途でトラック側面を利用可能。利用可能サイズは最大・横4.5m×縦3mまで。

TOTOCBA TRUCK ABILITY 04

CAN MOVE

04 「とよしば」から他の広場へ

全てを積み込み移動可能

このトラックを他の広場へ持っていけば、すぐにマルシェやイベントをはじめることができます。地域の公園から山間部の広場、海が見える浜辺に街中のアスファルトの上だって。とよしばだけでイベントをやするのではなく他の地域・次の広場に広がっていく事も見据えた動く倉庫です。

TOYOCBA TRUCK収納装備一覧

マルシェ・テント 20台分		KAGO車×8台分		その他
□ 横S材	20本	□ 3m×3mテント	12台	□ 音響機材
□ 横L材	40本	□ 延長コード	600m	□ 各種スタンド
□ X部S材	40本	□ ライン照明	210m	□ ヘキサタープ
□ X部L材	40本	□ LED電球	400個	□ 電動工具
□ X部金具	40個	□ テーブルX部	40枚	□ 工具一式
□ BOLT SET	280set	□ テーブル・椅子	6set	□ ラッシングベルト
□ 天幕	20枚	□ 木箱 S	50箱	□ 安全グローブ
□ テーブルTOP	20枚	□ 木箱 L	15箱	□ 他備品

長く大きな資材も効率よく収納、まとめて出し入れ

トラックの荷台へ綺麗に効率よく収納するためのコンテナを製作。Container01へは長尺の資材&大きな資材を収納。Container02には短い資材&細かい備品などを収納。この2つはドッキングすることができ、①少ない人数で②短時間に③効率よく資材を出し入れすることができるように設計されている。

01 Container
マルシェ・テント 20台分 Long部材他

02 Container
マルシェ・テント 20台分 Short部材他

a.マルシェの様子 b.夜のマルシェの様子 c.学生によるスクリーンの活用事例 d.他の広場への機材レンタル e.学生によるトラックの全塗装 f.g.h.とよしばスタッフによるマルシェ機材の製作。DIYでなんでも製作。

無いものは作る。D.I.Yは、とよしばの基本

とよしばのマルシェで使用するテントは見ての通り、既製品の出店テントではありません。なぜなら既製品には、とよしばが求めるテントはなかったから。とよしばが求めていたもの。暖かく、地域性を感じデザイン性が高く統一感があるもの。もちろんそんなテントは既製品にはありません。そこで、とよしばが出した答えは「無いものは作る」という考え。デザイン・設計から始まり、実際に使用。検証し、改善点をあぶり出し修正。新しい構造をまた試作→検証と、何度もトライ&エラーを繰り返し少しづつ現状よりも良いものにしていきました。そのようにしているうちに色々な人たちがテントに興味をもってくれるようになり、ついには地元の企業がDIYテントに興味を持つように。そして、重要な接続部の金具の製作に協力してくれることになったのです。このように地元企業の枠なはからいがマルシェのテントを進化させています。

株式会社アイサクの工場内。とよしばスタッフ
工場見学後に現地でテント試作を調整。

株式会社アイサク
工場長　今井祐二さん

地域と「とよしば」の連携。地元企業が協力

地元、株式会社アイサクの今井さん。繋がりの中からとよしばの困り事を色々と話してるうちにテントの重要箇所の金具を製作してくれることに。サンプルから製品まであっという間に！感謝の気持ちと、スゴイの一言！

豊田の間伐材を使用
一体感を生むデザイン
進化し続ける構造

事業者インタビュー

まちを想う とよしばダイアログ

西村 新 Shin Nishimura

株式会社こいけやクリエイト 代表取締役

1976年生まれ。愛知県豊田市出身・在住。大学のデザイン科を経て、印刷会社や不動産の営業、広告代理店などに勤務後、2011年に「豊田の明日をクリエイト」をスローガンに掲げ「こいけやクリエイト」設立。「人と人をつなぐ」をコンセプトに豊田市内全域をフィールドに活動中。

神崎 勝 Masaru Kanzaki

有限会社ゾープランニング代表取締役

1976年生まれ。豊田市出身・在住。情報処理・プログラムを学んだ後に、大阪の料理学校へ。卒業後、梅田スカイビル中国料理「燦宮」へ修行に。それと並行してクラブイベント、インド古典音楽など音楽イベントを企画・運営。愛知県へ戻り、2008年デザイン会社を設立。「TOYOTA ROCK FESTIVAL」「MOTOR CAMP」、香嵐渓おさつチップス「茶虎」、日本初の公道でのFMXショーケースなど、ディレクション・企画・運営として携わる。2016〜2018年ペデストリアンデッキ広場の店舗広場をデザイン・企画・管理・運営。

Interviewer

まちなか広場研究所 主宰

山下 裕子

プロフィールはP44参照

とよしばを始める前の二人

山下　お二人は同い年と聞いたんですが、出会いのきっかけは何だったんですか？学校が同じとか？

西村　いやいや、全然知らなかったですよ。

神崎　僕は西村さんの存在は知ってましたけど。そら目立つもん（笑）

西村　僕はあそべるとよたプロジェクト（以下、あそべる）で〇七商店を勝さんがやりだしてからかな。その前はそんなに音楽イベントなどに参加するようなタイプじゃなかったので。

神崎　僕も全然人と関わらない感じでしたね。裏方一本でした。街には本当に飲みにも出てきていなかったくらい。ものづくりが好きだったから、大阪で飲食の修行して、愛知に戻ってきてデザインの会社を立ち上げたんだけど、いつか飲食店をやりたいなっていう思いがあって。ちょうどその頃先輩がやってた店を僕が買わないかという話がきて、それを買って運営するってことになったんですよね。それから1年くらいですよ、本当にあそべるの話がきたの。

神崎さんの飲食への思い

山下　勝さんはとよしばもそうですけど、飲食っていうものをすごく大事にしているという感じがするんですが、何かその辺は思いがあるんですか。

神崎　もともと自分が料理を作るのが好きっていうのがありますね。それから作るとやっぱり、おいしい・まずいも含めて会話が生まれるじゃないですか。僕が修行してたのはレストランが多かったんですけど、そこではやっぱり厨房の中で作っているだけになっちゃうんですよね。でも小さい店だと、どうしても前に立たなきゃいけないから、お客さんと話が生まれて、豊田の人たちと出会うようになった。それも本当は僕は前に出るつもりじゃなかったんですけど、一緒に働いていた先輩が辞めることになって、フロントに立つ人がいなくなっちゃった。そしたら会社から「勝さんやればいいじゃん、どうせ大して何もやってないんだから」って（笑）それで立つようになったんですよ。だから本当は人付き合いが得意じゃないし、今でも西村さんがいるから本当に助かってる。よりたくさんのお客さんと接する機会が多くなってきた時に、飲食が運営者と広場とお客さんを繋いでくれるっていうのはすごく大事だと思いました。

誰でも入ってこれるような『普遍的』が良い

山下　私何気に、勝さんがやってるお店4つ行ったことあるんですが、ぶれない大事にしているものがある感じがします。その辺は？

神崎　こだわりはやってるうちにでてきたかな。最初は先輩から受け継いだ業態で、スペインバルみたいな感じでやってたんですよ。ペデストリアンデッキ広場（以下、ペデ）で〇七やり始めたときも、狭い空間でどれだけできるかを考えていただけ。でも三期目くらいからはまちに対して、自分のアクションが何か影響しているかもと思い始めて、〇七のコンセプトは変えてきた。時代が進んでもその場所に残ってくれるような普遍的な大衆的な店がやりたかったんですよね。だからうどんだったり、立ち飲みだったり、いつでも来れる飲み屋さんだったりとか。本当は若い子向けにオシャレにした方が商売的には良いけど、そうすると超つまらんし、人気コーヒーチェーン店でいいじゃんって思うんです。

山下　わかります。東北の震災復興の時に、三日後くらいにできたのが、お花屋さんと居酒屋だったんですって。だから今の勝さんの普遍的って言葉って、すごいそこに通じてるっていうか。やっぱり人が人を弔うことと、人とだべりたいみたいなのはいつでも必要としているということを感じますね。

神崎　ペデの時もね。酔っぱらいのおじさんから若い子まで来てくれてた。やっぱり年配の方から、よちよちの赤ちゃんも食べれるようなものにしたくて。オシャレすぎると、じいさんたち来れなくなっちゃうしね。

山下　じゃあ、あのちょっと古き良き感じのお皿とかも、そういう狙いというか計らいがあるんですか。

神崎　あれも、僕が好きなブランド使ってるだけなんですけど、佐賀のマルヒロっていう、波佐見焼の会社なんですが、アーティストとコラボしていてコンセプトがすごく好きで。だから、そういうじいさんたちと僕らの世代と若い子たちがミックスできる場所って何かなって考えたときに、やっぱり一番大衆がいいんじゃないかなと思って。大衆って簡単に言っちゃってますけど、受け入れられるかわからない。でも長く続ければ必ず自分たちのクオリティーも上がるし、お客さんも飽きずに来てくれるという気がしています。

山下　飽きるっていうかね、日常ですよね。

神崎　そうそう。日常の中にそういうのが落とし込める。僕が好きな飲食店の大衆っていうのは、なんか銭湯みたいな感じ。もう今銭湯ってないじゃないですか。僕、まちにある銭湯がすごい好きで、町の社交場みたいになっているというか。逆に地方の銭湯行くと、アウェイ感が半端ないみたいな。

山下　ね、みんなの日常にいきなり入っていくみたいな。

神崎　そうそう。でもそれって、居酒屋チェーン店や複合施設に入るようなカフェにはない感じですよね。

西村　確かにね。

神崎　それって、入りにくいけど個性も感じられるから。だからって、そうクローズにならない感じの、誰でも入ってこれるようなのがやりたい。とよしばやる時にそういうのが固まってきたという感じがします。

とよしばについて

応募のきっかけ

山下　とよしばは二人で応募されたということですが、どちらから誘ったんですか？

神崎　どっちも何もね。公募が出てることを知ってから、二人で話すきっかけが生まれて、やるかどうかは別として二人で話をした。

山下　やろうとなったのは何かきっかけあったんですか？

神崎　僕は話した時に、一緒にやったら面白そうだなと思いました。

西村　そうだね、僕も面白そうだなと思った。

山下　ぶっちゃけ二人は全然仕事は別にあって、やる必要はないわけじゃないですか。どの辺が面白そうだったんですか？

西村　ここがどうこうというよりか、勝さんと一緒にやったら面白そうだなと。今まで接してこなかった勝さんとそうやってきっかけをもらって話してみたら、案外似たようなところもあって。一緒にやったら面白そうだなと思ったのかな。

山下　すごい素直な（笑）

神崎　僕も完全に西村さんが、僕の持ってないとこばっかり持ってるから。

西村　お互いさまですけどね。

山下　ネットワークだって、かぶってないくらい違うでしょ。

神崎　そもそもかぶってない。僕は西村さんの話聞いて、これはパワーにしかならんと思いましたね。自分が持ってないものを持ってますから。今でも西村さんが打ち出してくれるもの全部、未来塾とか、ここでやってるオンライン公民館だったりとか全部、僕じゃ絶対やれねえだろうなってやつばっかりだから。僕は僕の得意なところで。その辺お互いたぶん分かっていて。だからすごいリスペクトしてますね。

「豊田が好き」よりも ここで知り合った仲間が好き

山下　二人は豊田生まれなんですよね。なんやかんやあっても豊田っていうものを大事にしてる感じがあるですけど、その辺りいかがですか。

神崎　僕はあんま豊田大事にしてないかもしれない（笑）

山下　本当？（笑）

神崎　わかんない。なんだろね。でもここで知り合った仲間が結構好きかもね。

山下　なるほどなるほど。すごくリアルです。

神崎　そう、豊田で遊ばなかったし、小中高で別に仲の良い人たちとずっとつるんでないから全然わからなくて。大人になってから、知り合った人たちが多くて、それこそ前の店とかペデをやりだしてから、交差する人達が増えてそれで…これ、なんかちょっとは豊田好きって言っといたほうがいいのかな？（笑）

山下　言わなくていいです（笑）今の話の方がよっぽどリアリティがある。だって、出会っていいなって思ってた人達という界隈がこの辺なわけですもんね。

神崎　うん、良いことも悪いことも繋がっていくわけじゃないですか。本当に、そうやっていくと意外と頼りにされるんですよね。この前も、知り合いの飲食店の女将が、「ごめんビールの樽貸してほしいんだけど！」と。

山下　ビールの樽？

神崎　そう、ビールの樽。同じメーカーのビール樽だったので、貸して！！！！みたいな（笑）。次の日に酒屋さんを通じてメロンの恩返し（笑）。他にも僕がずっと夜中に行ってた中華料理屋の社長が、お前ならできるだろみたいな感じで券売機設定しててって言ってきて。券売機設定できねえよ俺、みたいなさ。でもなんとかやったんですけど。ここでやってるだけで、色々繋がりの中で頼りにされていったりとか、逆にこっちも何かお願いしちゃったりだとか。そういう感じが好きかな。そういうとよしばでありたい。豊田大好きだから（笑）。

山下　（笑）今のお話を聞いて、私最近思っていることがあるんですけど、「仕事」っていう言葉と「働く」って言葉は似て非なるものじゃないですか。「仕事」は事に仕えるって書くけど、「働く」は「傍」、自分の周りにいる人達を「楽」にするっていうのが語源。最近仕事がないと移住できないとか言うんだけど、「働く」っていう言葉を実感できる人が少なくなっていると思うんですよね。要するに最近は、去年新入生になった大学生が、オンラインで授業とかするわけじゃないですか。そうすると、自分の周りの人っていうものがもはや存在しない状態になっていたりするんですね。でも、自分の家のそばにとよしばがあったら、色んな「傍」に会えるわけじゃないですか。自分の家のまわりにこういう場所があったらいいなって思うことがわかる。

神崎　そうですね。繋がりがまちに根差していける活動みたいなところに、ちょっと面白さを感じているのかもしれない、自分的には。

西村　人との交流の仕方が、たぶん携帯とか、SNSとかができて変わってきてる中でも、とよしばとか、○七に行きゃあ、別に約束してなくても知ってる人に会えるかもって思う場所みたいにね。学生に答えてもらうアンケートとかにも、とりあえずとよしば行こうって言ってくれてるって話を聞くと、いいなって思いますけどね。

『とよしば』の意義を伝える

神崎　でも繋がりや交流って、他を認めているからできる行動ですよね。他を批判する手法を多用するのは、言い方が悪いかもしれませんが誰にでもできる事だと思います。僕らはそうはなりたくないし、次の世代にもそんな事を伝えるべきではない。少しでも他を認める糸口を見つけて、他を知ろうとするほんの少しの努力が、相互の関係を加速させるのかなと。中には、ルールを破る子もいるんですよ。だからといって広場に禁止看板を掲げるだけじゃなくて、管理者が根気よく話していくし、寄り添って理解を求めたりとか。大事なんですよ。これが。そういう感覚を伝えていけるといいですよね。僕らスタッフもよく話したりするんです。スタッフもそういう感覚でここをやってくれていますし、ただの飲食店じゃないし、ただの施設じゃないことは、みんなが理解してやっています。だから頼られたりとか、助けたりとか、もちろん、商売的にも街のみなさんと力を合わせられたりとか。そういうことがスタッフのみならず、下の世代にも、あの場所ってそういう感じなんだって広がっていくところに意義がある。それで色々なことにもチャレンジできるし、ここに集まる中高生が、こういうコンセプトなんだって伝えていってもらえると、すごく難しいですけど、そういうのが大事だなとは思いますよね。次の僕らみたいなやつらがどんどん出てくればいいし、まちでそういう風に活動したり、何かの役に立ったりとか、そういうのがたくさん集まればたぶんいいまちになっていく気はするんですけど。

西村　そうだね、学生さんとかもなんとなくここに集まってきて居心地いいなって思ってるんだけど、それに関しては場所の力ももちろんあるんだけど、運営する人たちがそういう想いでやってるっていうのが伝わってくれれば。だからってこんな風にやってますってPRはしないんだけれども、そういう人達が運営してるから知らない間に自分たちも居心地がいいんだな、って思えるようになるといいよね。

自分たちで育てることの大事さ

山下　話を聞いていると二人で喋ってると色々盛り上がる話も出てくるんですかね。

神崎　出ます出ます、たくさん（笑）。

西村　即実行しちゃえってみたいな感じでやれちゃうのが強みかなって思いますね。トライ&エラーがやりやすい。

山下　トライ&エラーでいうと、天然芝もその気持ちの表れなんですかね。

神崎　自分たちで育てたりとか、そういうのって、他のとこの木とか植栽は誰かが水やったりしてんのかな。わかんないけど。自分たちも裏で野菜とか作ったりしてるけど、自分たちで育てるというのはすごいいことなんじゃないですかね。これが共有できるといいんすよね。

山下　共有できるといいますと？

神崎　例えば裏の人工芝が敷いてあるところとかで、まちの人たちと菜園できたらいいなとか。菜園にしてそういうところでお茶飲めてもいいし。区画でここはｔ-ｆａｃｅさんが育てていて、ここはＧＡＺＡさんが育てていて、みたいにして朝会話を交わすとかね。

西村　隣の人に、あなたのとこ草生えてたから抜いといたよ、とかね(笑)。

神崎　そうそう。土いじってモノ育てて、ここで刈り込んだ芝をコンポストで堆肥化して循環させてとか。若いやつらもその辺の子集めてきて草むしりしたらジュース一杯もらえるとかさ。色々育てるっていうことの大事さを伝えるとか、みんなが交われる空間を作るとか、そういうのがまちなかにあって一緒になってやる、そういうのが共有できるっていうのがいいことなんじゃないかなと思いますけどね。緑化とか言って全部市の公園課とかがやるんじゃなくて、自分たちでもしっかり責任もって手を加えるだったり、そういうのが広がっていけば面白いと思う。

山下　確かに。天然芝だと管理費が高いでしょとか、よくそういう話によくなるんですけど、そうじゃなくて、そこから生まれているものも、ものすごくありますよね。

神崎　別に芝じゃなくてもいいと思うんですよ、僕は(笑)。本当だったら、別にこんな立派な芝じゃなくたって、へっちょい芝とかでもいいと思うんです。まあただやっぱりぬくもりとか温かみだったり、そういうのはやっぱり大事なのかな。生きているっていうことはでかいとは思います。なかなか豊田の人たちってこういうところで寛いだりとか苦手なんですよね。ちょっと出りゃね、公園もたくさんあるし、わざわざまちなかに来てみたいな感覚は、なかなか豊田の人はないのかもしれないけど。ただ学生とかはしっかり使ってくれてるし、そういう意味ではすごく利用されてるなと思いますね。

とよしばの今後

次の世代にマインドを伝える

山下　では最後に。とよしばをこれからどうしていきたいですか？

西村　僕はこういう場が必要だなっていうのはやっていて思うので。僕らの契約でいくと、一応令和４年度までが最長にはなっているんですけど、こういうマインドというか、豊田の人達の暮らしの中にこういうとよしばの風景があるっていうのは、守っていかないといけないなと思う。視野は広がったかなと思うので、その経験をやっぱり活かしていきたいなというところと、45歳になったので、次の世代をどう育てるかというところを考えていかないとって気もするね。

自分たちにしかできないものを残す

神崎　ここでしか作れない景色みたいなのは作りたいと思いますけどね、あと残りの期間で。僕・西村さんのチームじゃなかったら出来なかったことは何個か残していきたいなっていうのと、どう下の世代に残していけるかですかね。そういうのを胸張って言えるといいのかなと思います。僕らがマルシェを自主で企画運営したのは1、2回かな？その後は僕らの立ち上げた『とよしばマルシェ』のコンセプトやスタイル、ＤＩＹで製作したオリジナルテントなどに共感してくれた「私たちもマルシェやりたい！」っていうプレイヤーの方々が何組も出てきてくれたんですよ。だから僕らは基盤を作っただけで、今表現してもらっているのは次世代のプレイヤーさんたち。とよしばはプレイヤーをサポートしつつ、一緒にイベントを作っているってのが今の現状。これって当初僕らが掲げていた事ができているんですよ。嬉しいことに。これもひとつの成果だと思っています。このような成果も、次に繋げてくための何か1ピースであったらいいなとは思いますね。僕らの成果が表立って見えてくるには、もうちょっとたくさんピースを集めないといけないですけど。でもこの積み重ねを『とよしば』でやる事。これが、重要じゃないかな。それが出来るのがやっぱりとよしばの良さだと思うので。ただ単にここの施設を管理運営する、飲食店を経営するっていうのは誰でも出来るから。そこの責任を表現していくのが、最終的野望じゃないですけど、任務みたいな感じですかね。あともう一つ重要なのは、やっぱり地元の人たちがやっている、手をあげて一緒にやってくれている、地元中心とした形っていうのが、僕はすごく大事だと思います。

地元が頑張ることの重要性

西村　本当にね、よそから来てやって何も言わずに去って、最後にはガランとしたところだけが残るっていうのが最悪なパターンだと思うので、やっている間に人も育てていかないと。例えばスタバが撤退しますってなった時に、次を担う人、どうしようじゃなくて。

神崎　ね、地元が頑張らないとね。もっと若い世代の経営者達が『どこの街より豊田の街で勝負したい！』って思わせるのが重要だよね。思わせるのは先人達の役目だとも思うし、市もいろんな意味で大きな役割を担っているとも思う。実際、とよしばの運営もこのプロジェクトありきから始まっている事。僕らみたいな地元のプレイヤーがいなくちゃ始まらないけど、それよりもそもそもこんなハードをつくって、可能性やチャンスを広げてくれた市役所のチームやそれに携わる方々に脱帽。プロポーザルで選ばれたとはいえ、僕や西村さんの地元チームを新しいステージでパフォーマンスさせてくれたのは感謝しかないかな。地元で頑張れるいい環境に僕らも貢献できればいいし、自分達も地元でまだまだ張んないとね(笑)。

新しいスタートのはじめの一歩

なんかしたい相談所

とよしばの管理人である西村がどんなことでも気軽に相談できる場所として月に1回開所しています。「こんなことできたらいいなと考えてるけど実行できてない…」、「自分の特技をどこかで活かせないかな…」、「活動をPRしたいけどどうやって広報しようかな…」、「何したらいいかわかんないけどとにかくおもろいことしたい!」など、相談内容は様々です。過去に培った経験や人脈、アイデアを総動員して、相談者が次の一歩に踏みだすきっかけづくりをしています。

Information

毎月開催(開催日はお問い合わせください)
①13:00～ ②15:00～ ③17:00～ ④19:00～(各回1時間程度)
料金:投げ銭制

企画&プロモーションをサポート

とよたまちさとミライ塾+

「とよたまちさとミライ塾+(プラス)」とは、"とよたならではを体験"することができるプログラムを集めた事業です。都市部、農山村部の様々な地域資源を題材に体験型プログラムを企画・運営する人「パートナー」の学びの場として、とよたを担う人材の発掘・育成を進めるとともに、多くの方に豊田市の魅力を体感してもらう事業です。パートナーがプログラムを提供して参加者が体験することにより、とよたの魅力を知り、地域資源を創作するきっかけとします。プログラムを通じた学びの場の創出を市民自らが行っていきます。とよしばが事務局を務めています。

Information

とよたまちさとミライ塾プラス
https://www.toyota-miraijuku.com/

Next Vision

まちづくりはひとづくり

いろいろな人のやってみたい。実現したいという思いを
形にできる場所でとよしばはありたい。
初めの一歩を踏みだすきっかけづくりやしっかりと学ぶ場など提供している
とよしばの取り組みをご紹介します。

オンラインでの活動の場づくり

とよたオンライン交流館

コロナ禍において、人とのつながりをなくさないようにと、「リアルとオンラインの架け橋」をテーマに2020年5月にスタートしました。毎月1回10時から18時までzoomを利用したオンラインでの交流の場として様々なコンテンツを提供しています。全国のオンライン公民館とも連携しており、豊田市にいながら全国のプレーヤーとの交流も楽しめます。コンテンツはオンライン交流館のメンバーが持ち寄り企画したもの。試聴するだけでもよいですし、活動のPRや参加者の交流を目的として、発信する側にも気軽になれる場所です。

Information

毎月開催（開催日はとよたオンライン交流館HPにて）
時間：10:00〜18:00
参加無料。入退室自由　http://tol-kouryukan.com

まちの新しい景色の創造

とよしばマルシェ

とよしばが主体となり、豊田の新しい景色を創り出すための試みとして2021年9月にスタートした「とよしばマルシェ」。やってみたいことはあるけど、お店を出す自信がない。そんな出店ビギナーのため、「魅せる」ディスプレイのアドバイスなど、とよしばスタッフがフォローしています。オリジナルのテントや什器を作成し、統一感のある雰囲気づくりにも力をいれています。テントはとよしば以外のイベントへのレンタルも可能です。若い世代の出店者を後押ししながら、次世代の担い手を育てるのも目標の一つ。今では、想いに賛同してくれた「やさしいマルシェ」、「とよた〇〇マルシェ」といった新しいマルシェも立ち上がり定期的に開催されるようになりました。また、高齢者を対象とした「ずっと元気マルシェ」を平日開催するなど新しい取り組みもおこなっています。

全国で活躍する人たちから学ぶ

TOYOCBA CREATIVE TALK

全国の様々なフィールドで活躍する方をゲストにお呼びして、とよしばにて新しい豊田のカタチを考えるトークタイム。各地での取り組みの事例紹介や、活動する上での心構えやアイデア、成功例失敗例を聞き、語りあうことで、我がまちと照らし合わせ、豊田で活動するプレイヤーの刺激になり、今後の活動の幅が広がることを目的としています。なるべくリアルでの温度感を大切にしていますが、コロナ禍ではオンラインでの開催もありました。

学びと実践の場

とよしばスクール

従来のイベント企画立案手法に加えて、これからの時代に必要な問題解決能力、事業継続に際して必要な考え方を学び、実践する場「とよしばスクール」。全5回のカリキュラムの中で、イベント等の企画の考え方、運営方法を学ぶだけではなく、実際に開催するところまでをゴールとしています。一期は「イベントの開催」、二期は「マルシェをつくろう」をテーマに開催しました。とよしばの運営者からのアドバイスだけではなく、市内でイベントやマルシェを開催している先輩たちの話を聞いたり、現場を見学もします。一期生が二期生のアドバイスをしたり、二期生が一期生のイベントのお手伝いをしたり、お互いのイベントに出店しあうことも。学び合いながら横の繋がりもつくり、お互いにサポートしあう関係性を築いています。

Player's Interview

プレイヤーインタビュー

自分たちのやりたいことや、街のためになることをとよしばを使って
実現しようとする人たちをプレイヤーと呼びます。
そんなプレイヤーの人たちにとよしばの印象や思いをお聞きしました。

図書館から飛び出して本とイベントが出会うきっかけ

豊田市中央図書館
とよしば担当
山口 早苗
松本 沙綾

豊田市中央図書館は2020年6月からとよしばさんの本棚をお借りして、「豊田市中央図書館×とよしば　マンスリーピックアップブックを行っています。月ごとにテーマが変わる、ユニークな本の展示コーナーです。展示されている本は、芝生広場や近くのベンチで読むことができます。晴れた日には青空の下で、雨の日でも落ち着いた室内で気軽に読書を楽しむことができるのが、この「マンスリーピックアップブック」の一番の醍醐味ではないでしょうか。

毎月のテーマは図書館スタッフととよしばのみなさんとで一緒に決めていて、みんなで決めたテーマを元に図書館スタッフが選書をしています。図書館内の企画展示と違って貸出ができないので、「家に持ち帰ってじっくり読みたい…」というような本よりも、訪れた皆さんが思わず手に取ってしまいたくなるような本や、気軽に読むことができる本をピックアップしています。今月はどんな本が置かれているのかな、そんなところにもぜひ注目してください！また、とよしばさんのワークショップでは「マンスリーピックアップブック」と連動しテーマに沿ったキーホルダーを作ることができます。毎月サンプルをいただくのですが、図書館スタッフからも「かわいい」と好評です。今までだと「※バラン（テーマ：芝生）」がスタッフ内で人気でした。どんなキーホルダーになるのか毎月の楽しみの一つです。

とよしばマルシェでは、あおぞらおはなし会を開催。図書館を飛び出して行うおはなし会はとても緊張します。普段の図書館のおはなし会に来る子は、絵本が好きな子。です。とよしばマルシェに訪れる子たちの中には絵本に馴染みが無い子もいると思います。その子たちの心をがっちり掴むことができるのかが、私たち読み手の技量にかかっているのですから、担当のスタッフも毎回ドキドキです。とよしばさんには毎回ピンマイクや、訪れた子たちがゆっくり楽しむことができるように、クッションや椅子などを用意していただいています。

「マンスリーピックアップブック」、あおぞらおはなし会、他にも、とよたまちさとミライ塾＋への参加や、リサイクル本の配布、出張貸出など、いつもとよしばさんにお声をかけていただいて楽しいイベントに参加することができています。

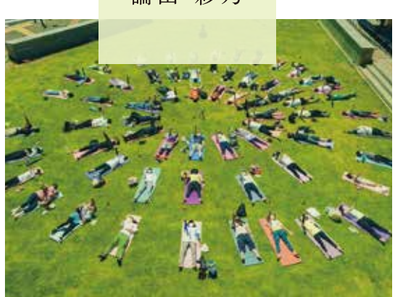
※バラン：弁当箱等に入っている、
食材同士を仕切るための草型のシート

とよしばは「人と人とが自然につながる場所」

ヨガインストラクター
Ron Chat Yoga 代表
論田 彩乃

私ととよしばの出会いは2020年5月末、豊田に住む友達を訪ねた時。2か月後、地元大阪を離れ、退職と同時にご縁があって豊田に移住したタイミングでフリーヨガインストラクターになりました。フリーランスとしての活動の仕方が全く分からない中始めたとよしばでの朝ヨガ。管理人の皆様とは毎朝挨拶を交わし、自然と仲良くなっていきました。2020年秋、管理人の山岸さんから「とよたまちさとミライ塾＋」の講師の依頼をいただいたのが転機。講師を務めるにあたって新三河タイムスの新聞社からの取材、その記事を見たある経営者の方からの連絡を受け、そこから人との繋がりが増えていきました。

翌年2021年夏「人との繋がりをくれたとよしばに恩返しを」と市制70周年のお祝いも兼ねて企画したのが「70人でひまわりYOGA」。とよしばの魅力を多くの人に伝えたくて、コロナ禍でも私にできる最大限のことをと思い実行。イベントは成功、参加者の皆様にはとよしばの場所としての魅力が十分に伝わったのではないかと感じています。その際おいでん市場や児童施設、カメラマンと繋がり、再び新三河タイムス、新たに中日新聞やまちなかPRESSの記者の方から取材を受け、更にご縁が広がりました。現代では人と人とが自然に出会い、コミュニケーションをとる機会は少ない気がします。そんな中「とよしば」はそれが叶う場所。地域への熱い想いをもった管理人の皆様と、芝生が作り出す雰囲気が自然な繋がりを生んでいるのだと私は思います。さらなる活性化を目指し、イベントで賑わう土日のお昼以外の時間帯にみんなが楽しめる何かが提供できたらと考えています。まずは朝ヨガを定期的に開催して地域の健康を促進します。また、マルシェについて学んだとよしばスクール第2期生として、今後はヨガイベントに限らず、人の繋がりが生まれるイベントを開催します。たった一人で豊田に来た私の恩人であるとよしばで出会った皆様とともに、とよしばから豊田を盛り上げていきたいです。



やさしいマルシェ
実行委員会

美と健康サロンbe-jin
田中 真美子

anam fair trade&natural
稲熊 なつみ

「やりたい」が形になる場づくり

やさしいマルシェ実行委員会の田中と稲熊です。やさしいマルシェは、「やさしさの循環」をコンセプトに、人や地球にやさしく、持続可能な社会を自然発生的に創ることを目的として、年に2・3回とよしばにて開催しています。

事の発端は、私たちが出店者として参加した「とよしばマルシェ」。おそろいの木製のテントととよしばの芝生の雰囲気がとても素敵だったことと、テントを用意してもらえて、とても身軽に出店できることが、ほかにはない魅力的なマルシェだと感じ、すっかり魅了された私たち。

その当日に、「私たちも、マルシェやりたいね！」と二人で意気投合し、翌々月に開催の運びとなりました。

とよしばは、ただの場所貸しではなく、街全体の盛り上がりを視野にしたとよしばの活用を考えておられます。その上でやさしいマルシェの在り方や、出店者さんと一緒に作り上げる方法を教えてくださいます。

この様にとよしばは、私たちの「やりたい！」「やってみたい！」と言う想いに寄り添い、共に形に出来る場所です。想いを形にできる場があることは、とても素敵なことだと思います。

ぜひ、みなさんも、気軽にとよしばを訪れ、あなたの「やりたい！」を形にしてみて下さい。きっと豊かな出逢いや経験を得られると思います。

たくさんの人たちの「やりたい」が形になることで、彩り豊かに、人と人が横に繋がっていく、そうした時間が増えることで、温かく、やさしい豊かな街へとつながっていくのではないかと思います。

これからもみなさんと共に「とよしば」がそんな豊かな場作りを、たくさん生み出していってくれるのではないかと思っています。

また、ほかのマルシェ主催者さんとの交流などのお手伝いもくださり、全体でレベルアップしていくことを目指していらっしゃることが感じられます。

みんなの「まる」な空間

とよた○○マルシェは2021年4月に豊田市内の障がい福祉の同志で立ち上げ、年4回とよしばにて、とよしばマルシェ実行委員の全面的バックアップのもと開催しています。いろいろな人がいて、誰でもいろんな楽しみ方ができる。人とヒトとの繋がりの輪を感じ、自然や環境（SDGs）、コドモ、福祉、多様性について触れたり考えたりすることを目的としたマルシェです。福祉というと高齢者や障がい者の方を対象にした言葉のように思われますが、社会の幸福という意味も持ち合わせています。とよしばに集まる多様な人達との共生が、とよた○○マルシェにとって重要なキーとなり、車椅子ユーザーやベビーカーに赤ちゃんを乗せているご家族なども満足してもらえるマルシェとなれば、社会全体の多くの人達が楽しめるマルシェになるのではと感じています。このような目線を大事にしていく配慮が普通になることを願って活動しています。

とよた○○マルシェ
実行委員会

一般社団法人Re Smile
理事・理学療法士
原田 隆之

とよた○○マルシェでは、障がい福祉施設利用者の方々にマルシェ関連の制作で関わって頂いています。また、将来福祉に関わりたいという学生さんもボランティアとして参加してくれています。そんな様々な形で関わりを持ってくれる皆さんはマルシェの『まるっとサポーター』としてとても大切な存在です。会場内には車椅子ユーザーの乗降スペースを設け、出店者さんは車椅子ユーザーや子ども達の目線を配慮した展示を行い、体験ブースでは全ての方が楽しめるような配慮を、福祉施設で実際に利用者さんにも試してもらいながら取り入れています。様々な思いやりや配慮は、とよしばサイドの理解と協力のおかげです。とよしばという空間で、それぞれの生き方が交流して価値観が広がり、どんな人にも過ごしやすい街になって欲しい。集う人みんなに開かれた「まる」な空間を作っていきたいと思っています。そんな想いにさせてくれるとよしばは、みんなに愛される大好きな大切な場所です。

中京大学草薙ゼミ
鶴田 優菜

とよしばで出会った笑顔と暖かさ ひまわりプロジェクト

私達、中京大学草薙ゼミの学生有志9名は、新型コロナウイルスで低迷した豊田市の活性化を目的とし、「ひまわりプロジェクト」を立ち上げ、とよしばさんと協力して活動しました。「ひまわりプロジェクト」とは具体的に、豊田市に関わる人達の将来に対する希望を、紙に集めて、モザイクアートを作ろうというものでした。初めは、本当に簡単な思いつきで、「こういう風にやれたらいいな」という漠然とした考えからのスタートでした。とよしばのスタッフさんとやらせていただけるメリットは大きく、地域に密着できるという点でした。とよしばには昼夜問わず、多くの世代の人々が訪れます。子連れのお子さんや、学校帰りの高校生、カップルに、お散歩中の老夫婦…世代に関係なく、沢山の人たちを集められる、環境と人柄にとても魅力を感じ、ここでの活動を決めました。

モザイクアートに必要な皆さんの将来の夢や希望を集めるにあたって、とよしばさんのマルシェに出向き、来場される方々から集めたり、自分たちの友達や知り合い、そして豊田市駅を中心に街を回り、沢山の人達にご協力いただきました。街を明るく、元気にする目的で活動していた私たちでしたが、活動を通して出会う人達はとても暖かく、私たちの方が沢山の元気をもらうことができ、とよしばでのモザイクアート放映時には、本当に言葉にできないほどの達成感と感動がありました。

コロナ禍において、何事も諦めてしまいそうになりがちなご時世ですが、人との繋がりというものは、どの時代においても、貴重な宝であると、考えます。「ひまわりプロジェクト」はそんな繋がりの大切さを感じることのできた企画でした。時代に関係なく、これからの未来を担う子供達が明るく元気に健やかに過ごせる豊田市になることを祈ります。

「ひまわりプロジェクト」製作において、ご尽力いただいた全ての人に感謝します。ありがとうございました。

TURTLE ISLAND
ALKDO
橋の下世界音楽祭主催
永山 愛樹

とよしばでの旧盆 盆踊り櫓鎮座「橋の下盆踊ラズ２０２０」

コロナウィルス感染拡大の為、軒並み夏祭りが中止となった2020年。戦後初めての祭の無い夏、やむを得ない事態でしたが、生きている人間の盆踊りは開催できませんでしたが、目には見えない先祖祖霊達の盆踊りと、せめて街行く人々に視覚と情緒だけでも味わっていただき不安と疑心に溢れたコロナ禍にせめて道ゆく人々、とよしばで休憩する人々の心が和めばと橋の下世界音楽祭やトヨロックなどの関係者、地元有志達のアイデアで8月31日～9月2日の旧盆に合わせて豊田のど真ん中「とよしば」にて橋の下世界音楽祭の所有する「千鳥櫓（ちどりやぐら）」と、竹組みで作られた巨大な茄子とキュウリの精霊馬の行燈と踊り櫓提灯を灯しました。

豊田市の中心部、櫓が建ち、提灯が灯った「とよしば」。

実際、開催中、通りすがる方々や、近所のおばぁちゃんらがベンチに腰掛け櫓と提灯を眺めて「雰囲気だけでも和むねぇ」「涙でてきちゃうわ」などと、たくさん声もかけて頂き沢山の方々がとよしばで休憩されていましてそれだけでもやって良かったなと思いました。

また、櫓の上にゲストを招いて庶民からの観点での「祭り、文化～これからの街のあり方」など連日トーク配信もしました。

会場としてお借りした「とよしば」は昼夜問わず子連れや老人、若者達の憩いの場となり、裸足でかけたり寝転がったりヨガしたりと、コンクリートに囲まれた街中のささやかなオアシスとなり、こういった新しい感覚の公設の場若者達をはじめ世代や立場役職を超えた様々な人々が交差交流し様々な実験の場として手軽に活用できるのが魅力的でした。街や人の心に本当の意味での活気と創造性の生まれる豊かな場所が増えていくといいなと思います。

開催概要 **橋の下盆踊ラズ2020櫓座談会ライブ配信**

8/31(月)
出演
- 根木龍一(microAction/橋の下世界音楽祭)
- 永山愛樹(TURTLE ISLAND/ALKDO/橋の下世界音楽祭)
- 竹舞(TURTLE ISLAND/ALKDO/橋の下世界音楽祭)

ゲスト
- 西守芳泉(民謡 芳泉会、民謡パラダイス)

9/1(火)
司会
- NOB(ヤボネシア)
- 永山愛樹(TURTLE ISLAND/ALKDO/橋の下世界音楽祭)

ゲスト
- 大石始(フリーライター)
- 西守芳泉(民謡 芳泉会、民謡パラダイス)

配信：臼井康弘

9/2(水)
司会
- NOB(ヤボネシア)
- 永山愛樹(TURTLE ISLAND/ALKDO/橋の下世界音楽祭)

ゲスト
- 天野博之 (足助 寿々家主人)
- ブルーノ丸根(足助 巴一座/玉田屋)
- 青木信行(足助 萩野自治区区長農村舞台寶榮座(宝栄座：ほうえいざ)協議会会長)

配信：臼井康弘

とよしば×崇中美術部

豊田市立崇化館中学校
美術部顧問
加藤　郁也

令和3年10月に、崇化館中学校の美術部は、とよしばで巨大チョークアートを披露する機会をいただきました。

今回実現した崇中美術部の路上アートも、とよしばのコンセプトである「集まる」×「交わる」×「育つ」×「広がる」に沿った活動だったと振り返ります。

まずは「集まる」×「交わる」です。とよしばで一緒にアート活動をしようとお誘いをいただき、最初に打ち合わせに伺ったときのことです。学校の諸活動でも必須である新型コロナ対策について、「屋外での活動」「互いに距離をとった配置」と、いろいろ相談させていただきました。その上で「40名以上いる部員全員で参加したい」ともお願いしました。

結果、崇中美術部単独での活動をご提案いただき、行きついたのが今回の巨大チョークアートでした。屋外で、距離をとって、大人数で…。つい負担に感じてしまうような条件も、実現に向けて前向きに検討したときには、アイデアを生み出す良いヒントになるのだと実感しました。

そして「育つ」×「広がる」です。日ごろの美術部の活動は、美術室での制作活動がメインであり、運動部のように大会や練習試合に出かけることはありません。そのため、部員と顧問以外の人と関わるような機会は限られています。様々な人と関わることで築かれる情操は、作品制作に留まらず、何事にも生かされるものだと考えています。そういった面でも、今回の活動は本当に貴重な経験になりました。制作中、道行く人からの質問に丁寧に答えたり、初めての経験にも臆さず、積極的に描いたり、いきいきと活動する生徒の姿を見ることができて、何より嬉しかったです。

とよしばは、楽しむ・語らう・遊ぶ・学ぶ等、様々な経験が一度にできる場所だと思いました。企画の打合せから画材の準備や事後の片付け、当日は明るい笑顔で子どもたちを励ましてくださったスタッフの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

とよしば は憩いの場であり プラットフォーム

youtube配信チャンネル
「We Live !」代表

WE LOVE とよた
サポーターズ

うたれん ごり

とよしばが出来てから、配信チャンネル「We Live !」の配信場所として、毎週利用させて頂いています。

そんな僕のとよしばへの素直な感想は、「なんて良い場所が出来たんだ」という事です。

芝生のオープンスペースやゆったりと過ごせる飲食店、その場所には豊田で活動する皆さんの情報や想いも詰まっています。

外では学生が友達との談笑をしていたりと、世代を問わない憩いの場となっているように思います。

僕らエンターテイメントを生業とする者にとっては、イベントスペースとしても開放感のある最高の場所です。

そんな場所を利用させて頂き思う事は、もっと多くの方にとよしばを自己表現の場として使って貰えたらという事です。

とよしばに訪れる方の中には「ここで楽しい事をしたいけど、どうしたら使えるのか分からない」という方もまだまだいるでしょう。

特に、学生などの若い世代が自分達のやりたい事ができる場所としてとよしばを利用して貰えれば、豊田はもっと活気に溢れ、愛される街になるのではないかと思います。

その為に必要なのは、とよしばが市民の為のプラットフォームだという情報を如何に広く知って貰うかという事です。

こちらが発信する情報をキャッチして貰いやすいように魅せ方を工夫し、世代に合わせたツールでとよしばの楽しい使い方をアピール出来れば、若者にも気軽に活用して貰えるのではないかと思います。

そして、そんな若者が未来の豊田を支える次の担い手になってくれたら嬉しいです。

とよしばはSNSだけでは感じられない、人との繋がりと温かみが感じられる場所であり、心の繋がりが簡単なようで希薄になりつつある現代では貴重な、無くしてはならない場所です。

とよしばが、そうした市民のコミュニケーションを支えるプラットフォームとして、この先も豊田に在り続ける事を心から願っています。

とよしばで 利用者に聞きました 何してる？

中学3年生の仲良しグループです。とよしばには、サッカーやフリスビーをしにきたり、友達と集まったり、めちゃくちゃよく来ます。今日は先生への卒業記念のプレゼントを、みんなで手作りするためにとよしばに来ました。中学卒業して、高校生になっても絶対とよしばに来たいです！とよしば最高！

みんなでワイワイ
集まれる場所

芝生の上で
のびのび
遊んでます

今日は縄跳びをやろうと思って、親子3人で来ました。以前もここで縄跳びをしたんですが、なぜかたくさん飛べたんですよね。芝のクッション性があるからかな？なんて思ったり(笑)
とよしばには月に１回くらい、図書館や買い物の帰りに寄っています。子どもがのびのび遊べるし、密にもならないので良いですね。

Hoco Touch
3,186

○七商店の常連です。コロナ禍前は毎週来ていましたが、今は2週間に1回のペースで。来るときには、ホコタッチの計測もしてもらってます。
飲みに来たタイミングでちょうど芝生でイベントをやっていたりすると、パフォーマンスを見ながら仲間と一緒に過ごせるのが楽しいです。
コロナ禍でイベントが少なくなってしまって残念だけど、またみんなで気軽に楽しめる日が来て欲しいですね。

仲間と過ごす
楽しいひととき

Local Director Voice

私から見たとよしば

さまざまな地域に出向き、外側からの目線で、時に冷静に、
時に一緒になってその地域の良さを引き出しながら盛り上げている４名の方々に、
とよしばとこれからの豊田のまちづくりの未来についてお聞きしました。

豊田のまちのプロセスに、いつも

おきな まさひと Masahito Okina
まちびと会社ビジョナリアル共同代表

全国各地のローカルプロジェクトでコーディネートやプロジェクトメークを行う。住み関わる住民が主役となり、自分達で持続可能な地域を築けるよう、合意形成や官民の連携を醸成する伴走を行う。佐賀市市民活動プラザ評議員、(株)良品計画「暮らしの編集学校」社外メンター役、奥八女焚火の森キャンプフィールド官民連携アドバイザー等を務める。

とよしばと出会い一番驚いたことが、同じまちで活動する違うチーム同士でパートナーシップを組んで(今回で言うと新さんと勝さん)共同体として運営していると言うこと。これなんなく普通にやっちゃってるけど、全国各まちで活動し関わる人々からすると画期的なことで目からウロコである。例えばまちの病院と着物屋さんが共同体になったら?例えば、まちの美容室と、まちで人気のカフェが?っと、考えただけでそのエリアの地域特性とともに多方面に可能性が広がっていく。しかしその羨ましさは「明日は我が身」と一瞬にして問いに変わった。僕が住む九州の久留米というまちではどうだろうか?このような関係性や心意気や決意は今あるのだろうか?その備えは?そもそもこんな素敵な広場って、。

きっとやっている本人たちはそれどころではないのかもしれない。思想の違いから、ぶつかりもあるだろう。きっとそこには、一緒に動けるもの、支え応援するもの、見守っているものと多様なまちの方々の関わりもあるだろう。「とよしば」や駅周辺の動きも含めて、いつも豊田市のみなさんの「プロセスづくり」に、他のローカルに暮らし関わる僕たち地域人にとって、また同じ中核市で暮らす我々にとって希望そのものである。豊田のプロセスはいつも羨ましい存在であり、とよしばの動きをＳＮＳなどで見ると、いつももっと「僕も自分のまちでもっと頑張ろう」と思う。

「とよしば」に寄せて

澁澤 寿一 Juichi Shibusawa
NPO法人共存の森ネットワーク理事長

1952年生まれ。国際協力機構専門家としてパラグアイに赴任後、長崎オランダ村、ハウステンボスの企画、経営に携わる。NPO法人共存の森ネットワーク理事長。全国の高校生100人が「森や海・川の名人」をたずねる「聞き書き甲子園」の事業や、各地で開催する「なりわい塾」など、森林文化の教育、啓発を通して、人材の育成や地域づくりを手がける。明治の実業家・澁澤栄一の曾孫。農学博士。

芝生の上を走り回る子供、それを笑顔で見守る両親。温かな陽だまりで談笑する老人たち、宿題の答え合わせに夢中な高校生・・・街の顔が駅ならば、とよしばはその表情のようなものです。人と人、世代と世代が、芝生の上の小宇宙に集っています。

私は今年70歳を迎えようとしています。振り返れば20歳代からの半世紀、私たちの世代は、経済発展のために生きてきました。戦後復興と高度経済成長期が舞台であり、何とか日本を世界の中で輝く国にしたいという願いだけでした。戦後民主主義に守られ、効率性、合理性、経済性が何よりも大切だと信じてきました。私たちの世代は、コスパ(費用対効果)という言葉が好きです。お陰で、日本は世界3位の経済大国になり、世の中にはモノが溢れています。企業は「もっと便利に、もっとお洒落に、もっと速く、もっと美味しく、そしてもっとエコに」と商品を市場に供給しています。

そして、今、人々の中に漂う、この不安と孤独、社会の閉塞感はどこから来るのでしょうか?決してコロナのせいでもなく、ＡＩのせいでもありません。

何処かで、何かを、見過ごしてしまったのではないか、もっとも大切な何かを・・・

とよしばを眺めていると、その「何か」が見えてくる気がします。言葉にすると「関係性」という味気ないものになってしまいます。子供たちの純真さ、愛される姿、見守られる安心、語らう穏やかさ、そこに降り注く柔らかな日差し。そのすべての関わりは、私たちの求めている幸せの姿です。数字で表せるものでもありません。もちろん、お金で買えるものでもありません。

これからも豊田の表玄関に街の表情として、とよしばがあり続けることを望んでいます。とよしばという笑顔で、お客様をお迎えすることが、未来に向けて豊田の示す「希望のかたち」だからです。

私たちはまちなかに居場所がある

「とりあえずとよしば集合ね」中学生の娘さんが友達とこんな会話をしていたと、知り合いの方が教えてくれた。確かにとよしばに行くと中高生の姿を多く見かける。何か目的があるというよりは、そこにいるということをなんだか楽しそうにしている。彼女・彼たちの居場所はショッピングセンターでもファーストフード店でもまちの外れにある公園でもない、まちなかにある公共空間なのだ。これが豊田というまちの豊かさなのだと感じた。

とよしばでは中高生以外にも、小さいこども連れの親子をみかけることも多い。こどもたちは裸足でかけまわったり、側転をしたりしている子もいたし、芝生の上をハイハイしている赤ちゃんもいた。中には使いこなし上級者か、小さな折り畳みテーブルを持参してピクニックを楽しんでいるグループもいた。筆者も2歳差の娘を育てる子育て当事者だが、乳幼児のこどもを連れてまちに出る時ことは親にとってはなかなか負担が大きい。こどもが迷惑をかけないように気を遣い続け、そんな緊張感や飽きからこどもがぐずぐずしだす。そんな時にこどもが自由に過ごせる場があるだけで親子の緊張がほぐれ、安心した時間を過ごすことができる。

たくさんのお金をかけて時間を過ごすことができない中高生、こどもという自由な存在を抱えた親子、まちなかで過ごすことにハードルがある人々の居場所をとよしばは作っている。こうした懐の深い公共空間を作るには、ただ開いた場があれば良いわけではない。魅力的で居心地の良い空間を作るために、日々の様子を見守り、対応する人々がいるからだろう。

とよしばでは企画されたものから自然発生的なものまで様々な活動が行われている。朝には親子体操のワークショップが行われ、昼にはこども連れがピクニックをして、夕方には高校生が勉強をしたり、動画の撮影をしたり。週末には、主催者や季節によってさまざまなマーケットが開催されたり。与えられた枠にはまるのではなく、それぞれが自分のフィールドとして主体的に活動している。そうした場の使いこなしをとよしばは応援してくれている。

また、とよしばでは豊田のまちを「使う」「盛り上げる」イベントを企画・実践するプレイヤーとして育てる人材育成プログラム「とよしばスクール」を行っている。6人程度の少人数で5回開催、さらには都合がつかず欠席すると個別フォローまである。とよしばスクールは本気で参加者の方に伴走しようとしている。とよしばという場所があることで、企画を実践に繋げる大きな課題になる場所探し、場所の許可を得るハードルも下がり、実践に繋げやすい特徴もある。筆者も講師として呼んでいただいたのだが、筆者が参加した回では豊田で既にイベントなどの実践を行っている方々を講師として招き、参加者と1対1で企画を考えた。参加者には高校生もおり、とよしばスクールで提案したの作品展示を実際に行った。とよしばスクールで得た経験はもちろん、参加者同士の繋がりや参加者と講師、運営者との繋がりは今後も様々な局面でいきてくるだろう。

豊田のまちなかには、人々の居場所があり、活動の場所があり、学びの場所がある。このことは、人々にとってまちを愛する十分な理由になるだろう。豊田が好き、豊田のまちなかが好き、とよしばでの時間はそんな思いを人々に育んでいるのではないか。

鈴木 美央 Mio Suzuki

O+Architecture 代表社員

早稲田大学理工学部建築学科卒業。慶應義塾大学理工学研究科勤務を経て、同大学博士後期課程、博士(工学)取得。現在は建築意匠設計から行政・企業のコンサルティング、公共空間の利活用まで、建築や都市の在り方に関わる業務を多岐に行う。著書「マーケットでまちを変える〜人が集まる公共空間のつくり方〜」(学芸出版社)、第九回不動産協会賞受賞。

ほど良い距離感 そのときの気分ファーストな、居場所

夕暮れの美しいある日、ハンバーガーを頬張る少年の姿をみかけた。駅前のハンバーガー店から、ここまでは約200m。遠くはないけれど、近くはない。それでも、わざわざお持ち帰りをして、移動して、このカウンターで食べる。そう、ここで食べたい！という選択と行動が起きている。感動した。そして、その光景を、ここの運営者であり併設店舗〇七商店の経営者でもある神崎氏は「いいっしょ！」と目を細め眺めている。ご自身の店舗の売上につながっていない上に、下手をしたらごみが捨てられ厠だけを利用される可能性があるにも関わらず。

地域の要の辻(道が十字に交差しているところ)の横に、溜まり場(歩行者専用空間)を整備したとよしばプロジェクト。辻を往来するひとたちは、芝生でくつろぐ多種多様なひとの姿にふれ、時にその風景に惹かれ、自らもすいこまれる。しかも、とよしばの芝は天然芝である。天然。つまりは自然であり、呼吸をしている生き物が一面に敷き詰められている。その芝が健やかであり続けるためには、手入れがいる。それは、水やり・芝刈り・肥料やり・除草・養生等と多岐にわたる。運営の早朝チームが道ゆくひとたちと挨拶や会話も交わしながら作業する様は、早朝の空気をさらに！さわやかにしていることだろう。また、そうした手入れ活動を担うひとたちの背中を目にすることで、この場所を大切に想う気持ちが伝播しているに違いない。イサム・ノグチは、風にあたることは、ひとも自然の一部であることを思い出させる行為だと語っているが、ここでは天然芝の上で風にあたれる場所を確立している。

とよしばには、まだまだ様々な工夫がある。建物と芝の際(物と物との接するところ)には備え付けのカウンターがあり、また隣接している建物との際には移動が可能なカウンターがある。このどちらも高さといい幅といい量感が絶妙である。筆者は、道ゆくひとが滞在行動を起こしたくなる広場の在り方をいつも模索しているが、このカウンターはまさに滞在行動の「つかみ」となるような存在だ。際を顕在化させ、ほどよく視線を遮り、寄り掛かれる背もたれにもなる。ひと目があることで安全を確保しながら、ひとりの時間や一緒に居る(たい)人との親密感を高められるのも広場の存在価値である。それを増幅させる！このカウンター。発明と呼びたい。「とよしば」の正式名称は、豊田市駅東口まちなか広場。広場の特徴は接している道路や建物との敷居が平らであり往来がしやすいことであるが、乗降者数が4万人を超えるターミナル駅の近くでしかも大通りに接している立地でありながら面積は約560㎡のため、そこまでの余白空間をつくれなかったのではないかと想像する。そのためデザインが重要であった。さらに、カウンターの材料は、豊田市の木質化推進事業の一環である一般社団法人ウッディーラー豊田の材料で製作されている。この法人の目標は、①森と人の距離を近づけ、豊田に住む人、森に関わる人の暮らしを心を豊かにします。②木材の利用により、人口林の手入れを促進し、健全で美しい豊田の森をつくります。③木材産業の発展と創出により地域経済を活性化します。であるが、日頃からその活動の賜物である素材や空間にふれることで伝播している。

2040年には、3人に1人が高齢者(65歳以上)となり、しかも約4割が単身世帯となる個の時代。そのような時代において自宅のすぐ近くに自分の好きな広場があればどんなに心強いだろう。好きな時に来て、おしゃべりしたり・食べたり飲んだり・眺めたり・参加したり・一人でいたり・輪に入ったり。そして、好きな時に帰る。ほど良い距離感で、多種多様な顔見知りのなかで、そのときの気分ファーストでいられるとよしば。ご近所さんになりたい。

山下 裕子 Yuko Yamashita

まちなか広場研究所 主宰

1974年生まれ。全国まちなか広場研究会理事、NPO法人GPネットワーク理事。富山に移住し、演劇やアート関連イベントの企画制作に携わる。2007年よりグランドプラザ運営事務所勤務。2009年(財)地域活性化センター第21期全国地域リーダー養成塾修了。2010年より㈱まちづくりとやまグランドプラザ担当。2011年よりNPO法人GPネットワーク理事。2014年より広場ニストとして独立。その後、豊田・久留米・明石・神戸をはじめとする全国のまちなか広場づくりに関わる。

01 都心環境計画と「とよしば」

豊田市では、都心地区において多様な活動や豊かなシーンが複数の公共空間で生まれ、人のいる風景が連続するまちなかを目指すため、2016年３月に「都心環境計画」を策定しました。公共空間の活用「つかう」と再整備「つくる」を両輪に、都心地区の整備の取組を進めています。

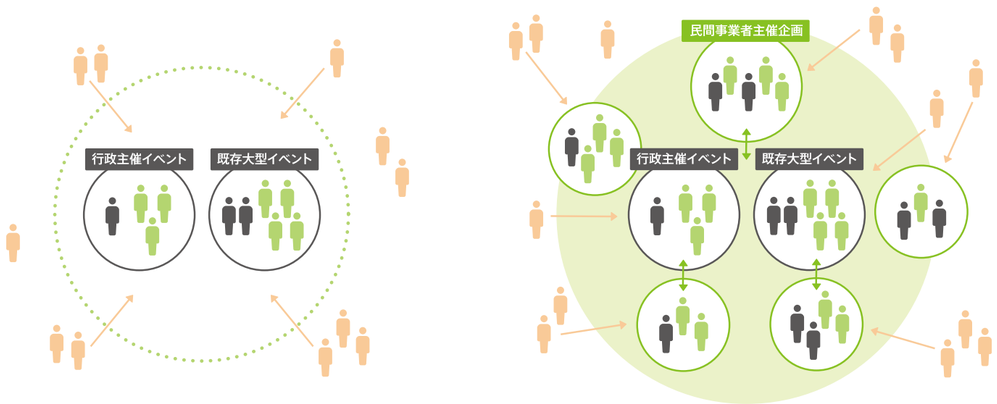
「誰もが来街したくなる魅力的な拠点（選ばれる都心）」を目指し、都心地区の賑わいを創出し、滞留者を増加させることを目標に置いています。

都心地区の賑わいづくり

「車から人へ」を体現し、新たな都心地区の象徴となる場所へ

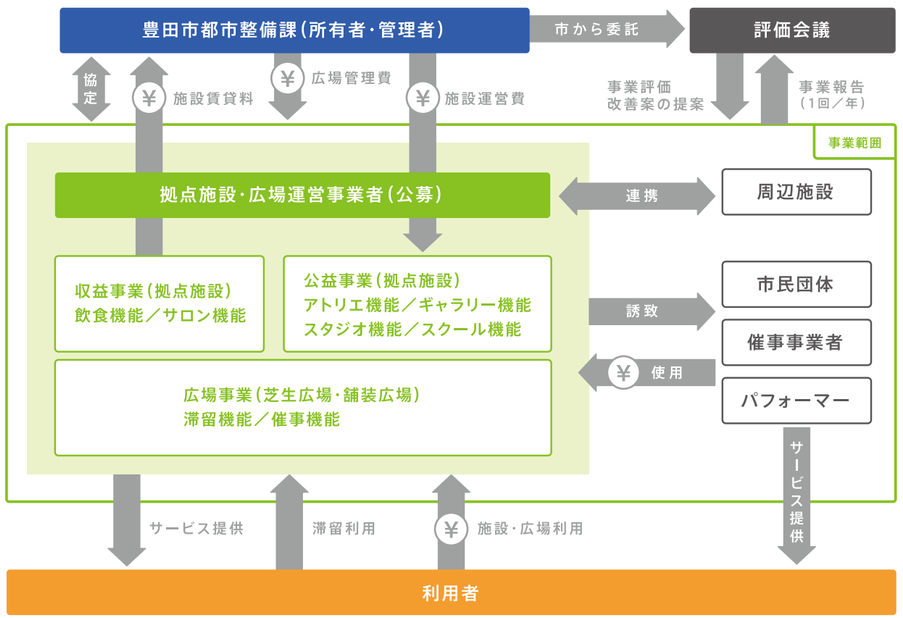
その取組の中で市は、気軽に、緩やかに、多様な人々が「集い」「交わり」、アイデアと愛着が「生まれ」そして「育つ」ための拠り所となる場、アイデアやチャレンジの受け皿となる開かれた場として、豊田市駅東口に広場を整備する予定です。それに先立ち、時限的に銀行跡地に拠点施設及び芝生広場、舗装広場を設け、将来に向けた人の滞留や賑わい創出のチャレンジを行うのが「とよしば」（＝豊田市駅東口まちなか広場拠点施設運営・管理事業）です。この事業を通して、都心地区の多様な「ヒト・モノ・コトとの出会い」に、より多くの人が集い、街の魅力を体感することで、「都心全体」に【シビックプライド・WE LOVEとよた】が育っていくことを目指しています。

02 とよしば公民連携モデル図解



これまで（行政主体）　　**これから**（民間主体）

これまでに賑わいフィールドをつくってきた市主催の事業や助成による公的なイベント（ふれ愛フェスタ、おいでんまつり等）に加え、市民や民間の方々の力とアイデアで「フィールド」自体をつくりだし、まちなかで育ってきたプレイヤーを束ね、多様な活躍の場を提供できる、マネージャーの育成・環境づくりを進めています。



豊田市ととよしば運営事業者は「豊田市駅東口まちなか広場拠点施設運営・管理事業に係る基本協定書」を締結しています。市と事業者は対等な立場で本事業を進めています。

03 経緯

2015-現在

あそべるとよたプロジェクト

とよしばの始まりは、2015年から実施している「あそべるとよたプロジェクト」にさかのぼります。このプロジェクトは、豊田市駅周辺にある開けた空間“まちなか広場”を、“人”の活動やくつろぎの場として開放し、さらにはとよたの魅力を伝え、とよたに愛着を持てる場所として使いこなしていく取組です。市民・企業・行政が一体となってアイデアを出し合いみんなの“やってみたい”ことを実現しながら、より使いやすい広場に生まれ変わるための継続的なしくみの構築を目指し実施しました。

2015年度は9つの広場で合計31のプログラムが行われ、ペデストリアンデッキ広場では、現在のとよしば運営事業者による飲食事業「TOYOTA DECK CAFÉ＆BREWBAR」が実施されました。

シティプラザ

ギャザ南広場

ペデストリアンデッキ

参合館前広場

2016-2018

ペデストリアンデッキ広場の実証実験

2015年度の取組結果を踏まえて９つの広場を類型化し、それぞれ適した形での活用方針を定めました。ペデストリアンデッキ広場は「収益事業型」として、2016年度は約半年間、2017年度は約１年間にわたり、公募により選ばれた「○七商店」（2015年度と同事業者）が運営を担い、飲食販売と活用コーディネート事業者の発掘、事業性の検証を行いました。

Before

After

2019-2023

とよしば（銀行跡地）の実証実験

ペデストリアンデッキ広場での検証を踏まえ、2019年より、更なる本格的な検証のため銀行跡地で新たな実証実験をスタートしました。今回は「収益事業型の広場の運営・管理モデル」を発展させ、さらに次のステップへ進むため、「プレイヤーを束ねるマネージャーを育成すること」を目指した公益事業も行い、相乗効果を生みながら「集まる×育つ×広がる＝新しい豊田のカタチ」を創出することを目指しています。ここで得られた成果を将来の東口まちなか広場の運用につなげていきます。

Before

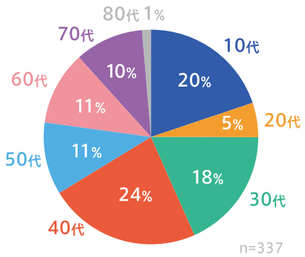
After

04 とよしばの利用状況

Q1 豊田市民に聞きました とよしばを知っていますか？

n=1007

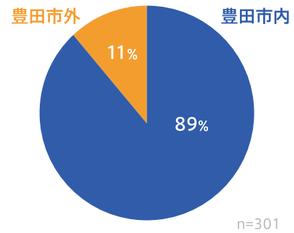
Q2 利用者の年齢



n=337

10代、20代の合計で1/4を占めていますが、40代や、60代以上も20％以上を占め、多様な世代に利用されています。

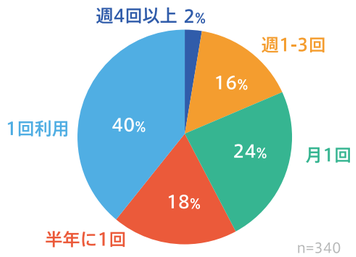
Q3 利用者の住まい



n=301

利用者の約9割が豊田市在住の方です。

Q4 利用頻度

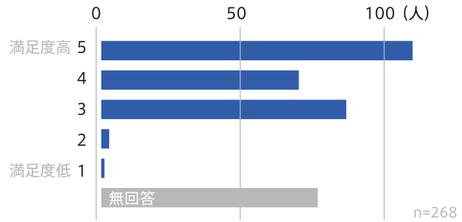


n=340

約40％は1回の利用ですが、月1回以上の回答も約40％あり、リピーター、新規利用者それぞれにバランスよく利用されています。

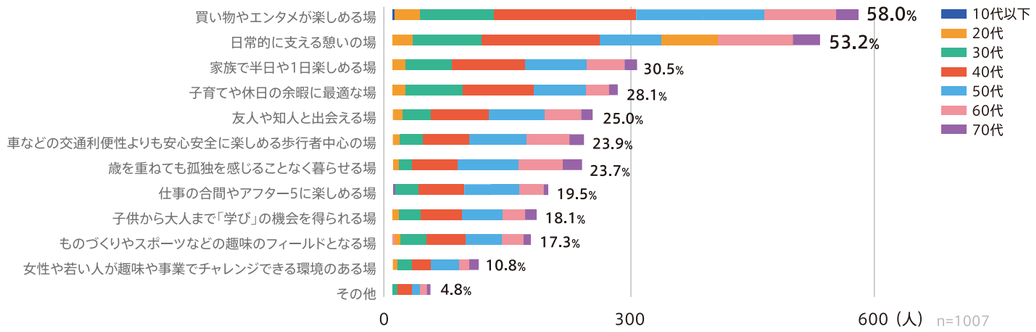
Q5 とよしばの満足度を5段階評価で教えてください

多くの方が普通以上、
高い満足度の評価をしています。



n=268

Q6 とよしばや周辺施設を含めて、今後豊田市駅周辺がどのような場になってほしいと思いますか



n=1007

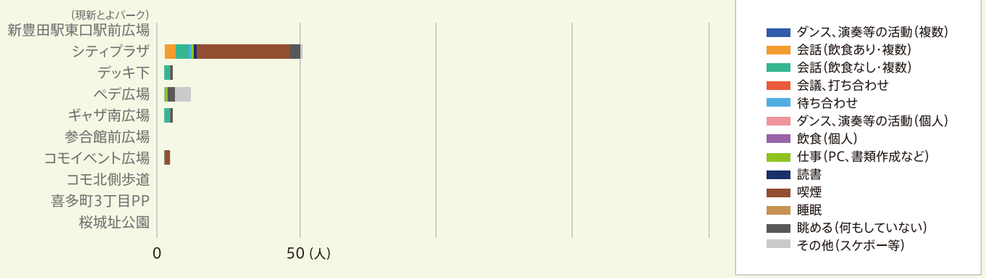
参照：2021とよしば利用者アンケート、Docomoプレミアパネル豊田市駅前周辺の利用状況に関するアンケート

「買い物やエンタメが楽しめる場」という意見に次いで、「日常的に使える憩いの場」という意見が多く、この2つが過半数を超えています。
とよしばのみならず、駅周辺がこのような場になっていくことが期待されています。

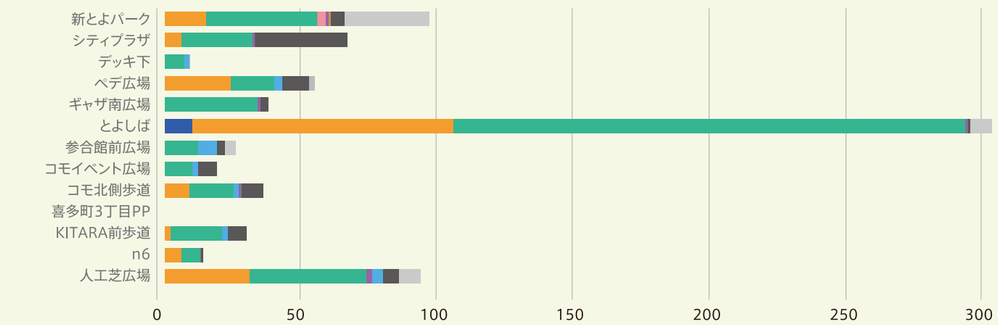
まちなかのアクティビティ

あそべるとよたプロジェクトが開始される前のまちなか広場の状況は、利用者が少ないだけでなく、活動の種類が単一であり、利用者の属性にも極端な偏りがありました。そこから5年以上がたち、現在の豊田のまちなかには、以前とは異なるアクティビティが生まれるようになっています。中でもとよしばは、他の広場と比較しても突出した利用者数と、最も多くの種類の活動が行われています。

滞留行動別利用者数 Before（2015.9.8）



滞留行動別利用者数 After（2021.7.17）



参照：2015・2021プレイス調査結果

05 実証実験を経て、本格整備へ

実証実験としての現在のとよしばの運営は2022年度末で終了します。その後は、2023年度から豊田市駅東口駅前広場の整備を始め、新たな東口まちなか広場として生まれ変わる予定です。東口の整備完了まで少し時間はかかりますが、新たな広場ができる日を楽しみに待っていてください。

- 2015年　あそべるとよたプロジェクト
- 2016-7年　成果検証・ペデ広場運営
- 2018年　暫定供用に向けた設計検討
- 2019年　暫定供用に向けた設計検討
- ▼
- 2023年～　豊田市駅東口駅前広場本格整備
- **東口まちなか広場供用開始**

とよしば

Toyota Creative Base Area

記録報告集

2022年3月25日
発行：とよしば（豊田市駅東口まちなか広場）
愛知県豊田市喜多町2丁目166番
https://toyocba.com/

編集・デザイン：
株式会社こいけやクリエイト
有限会社ゾープランニング

協賛：有限会社ハートビートプラン

© とよしば

Comment

一般社団法人TCCMタウンマネージャー
豊田まちづくり(株)代表取締役
河木 照雄

中心市街地の賑わいには、まちに沢山の楽しみを仕掛けていくことが重要と考えます。しかし、新型コロナウィルスの影響により、非常に苦しい時期を過ごすことになりました。そのような中でも、とよしばは多様な取り組みを展開してきてくれました。行政だけではできない運営事業者ならではの企画でとてもよかったと思います。

しかし、コロナの中で収益が思うように確保できず、財務的な不安や無理もあったはずです。公益的なミッションをもち、続けてこられたことに感謝するとともに、官民連携によるまちづくりである以上、行政側の仕組みの改善も必要と考えます。今後、豊田市のよりよい官民連携の在り方をつくっていく上でも、とよしばの実践を生かしてほしいと思います。

公共R不動産コーディネーター
飯石 藍

運営事業者の審査・選定だけでなく、オープン後には評価委員として、定期的に運営状況や街の人の利用状況、そして運営上の課題等を共有いただきながら、より良い状態を生み出すための評価・検討をするという立場で関わらせていただいています。ただ、評価委員というにはおこがましく、運営事業者、そして豊田市役所の皆さんに伴走させていただいているという気持ちで現場に寄り添っています。審査から運営にまでコミットするという仕組みは、全国的にも例を見ないものですが、空間が出来上がって終わりではなく、運営しながら育んでいくということに審査側も責任を持つという仕組みはとても意義があると感じています。

さて、とよしばオープンから2年数ヶ月余り、オープンからほどなくコロナ禍の影響で飲食事業ができなくなったり、広場の閉鎖と余儀なくされたりと運営事業者の皆さんにとって大変な状況が続きましたが、その中でもとよしばがまちなかにあることで、沢山の人の拠り所になってきたのではないかなと感じます。高校生の利用が芝生でくつろいでいたり、一方で仕事帰りのサラリーマンがお酒を楽しんでいたり、一方で高齢者の方も子連れの方も気兼ねなくとよしばを楽しんでいたり。いわば良い意味での「カオス」。広く誰でも利用できるという公共性に民間の持つ集客力の強い事業性が組み合わさることで、とよしばの利用者に様々な選択肢が用意されていること、そして多様な過ごし方が許容されていることが、とよしばの持つ魅力の一つです。またなんといっても芝生広場が駅前にあること！そこにごろんと寝転ぶだけで、まちなかにいても自然を感じられ、居心地の良さを感じられることも重要なポイントです。

そして、スクールを開催したり、オンラインコミュニティや相談所を設けたりと、まちのことを知り、まちなかでチャレンジしてみたい人の背中をそっと押して伴走するような機能を持っているのも、とよしばの持つ大きな特徴です。消費者としてだけではなく、当事者としてまちに関わる人が増えると、豊田というまちに愛着を持つ人が増えて、内側からも外側からも魅力が伝播し連鎖していくように感じています。

とよしばは、豊田のまちなかにある「苗床」のような場所。

3年7ヶ月という暫定期間の事業ではありますが、事業期間が終わっても、ここから芽吹いた動きが様々な場所に広がっていくことで、豊田がますます魅力的なまちに変化していくことを楽しみにしています。

NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事
錦二丁目エリアマネジメント(株)代表取締役
名畑 恵

コロナで祭りのできない時期に、「橋の下盆踊ラズ」の櫓がわざわざ広場の中央に建てられていました。駅前に集落の原点が現れたような異色な風景でした。本来の祭りの意味を思えば、今こそ自然への尊敬や服従を標ぼうする時かもしれないと、目の覚めるような思いでした。櫓を囲んで広場で佇む人の中には林業に携わる山の人、川の人、映え写真を撮影する女子高生もいて、親でもない大人におねだりをする子どもを微笑ましく思いました。「豊田はいいなー」と思える時間です。

ところで、私は「まちの縁側」という市民有志や民が運営する小さな居場所でしかできない包摂性があると考えています。公共施設の「みんなのため」という理屈ではできない、自分のため、自分の周りのためと、主語を小さくしていく私発・民発にこだわってきました。

しかし、とよしばには、公共施設のオープン性と、市民ならではの小さな居場所の包摂性が絶妙に融合しているように思います。勉強する学生や親子連れ、走り回る子どももいれば、相談事を持ち込み運営スタッフさんとしっかり対話を重ねる場面もあります。とよしばに立ち寄った人が安心感や居心地の良さを覚えるなら、または会話を伴う刺激的な出会いがあるなら、それはまちなかにとってすごい価値だと思います。

また、「いなかとまちの文化祭」が開催されたように、矢作川流域の暮らしの文化や林業、世界レベルの産業、バンクやアート、農村舞台や民芸など、オール豊田の骨太な魅力の発表の場としての駅前の可能性もみることができます。「WE LOVE とよた」がさらに広がっていきますように。